

白山ふるさと文学賞

第十一回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」〉

中高校生の部 優秀賞

「普通ではない生活」

北辰中学校三年 松川 千夏

私の母は日本人ではありません。私は母が違う国の人だと気になり始めたのは、小学校三年生の頃でした。その頃に私は学校の授業で外国の文化や言語に触れ、世界はたくさんさんの文化で過ごす人、いろいろな言語を使って生活する人がたくさんいるのだと、初めて知りました。

私がまだ小学校低学年だった時は、日常生活で母と話している時、そこまで会話に違和感は無かったのですが、私が大きくなるにつれ、学校でいろいろな言葉の意味を学んだり、難しい言葉を学んだ上で母と話す時、母はその言葉の意味について理解していないことがありました。

「それはどういう意味？」

と聞き返される事が今でも多くあります。一回だけ聞くのなら笑顔で答えられますが、何回も同じ事について聞かれるので、さすがに腹が立って

「なんでそんな事も分からないの。」

と母の事を考えもせず、ついつい母に酷い事を言ってしまう。そういう時、私はいつも思っていました。

「なぜ私の母は日本人では無いのだろう。」

そのことを母に言っても無駄だと思い、母には言っていなかったけれど、ずっと疑問に思っていました。テレビを見ている時でも、

「この人が言っている意味はどういうこと？」

と質問されて、テレビに集中出来なくなつて、つい母に怒ってしまいます。私がなにかしている時でも、母はかまわず、

「この漢字書いて」

「これなんて読むの？」

など、私の気持ちも知らないでただ聞いてくる母に少しうんざりしていました。他にも、学校に明日までに出さないといけない書類などがある、母に頼んでも、母は書く事が出来ませんでした。私が宿題で

分からない事があつて母に聞いてみると、母は私に教えるようにしてくれましたが、上手く日本語で私に伝える事が出来ず、私も母が話している事が理解出来ず、いつも姉や兄、そして違う人に聞いていました。「他の人はお母さんにやつてもらっているのに、なんで私の母はみんなと違うのだろう。」

「なんで私は普通の事が普通に出来ないのだろう。」

とずっと思っていました。私はただ普通に母と会話して、分からない事は聞いたり、みんなのように普通の生活をしてみたいと思っていました。

私は母が日本人ではないからという理由で、さいわいな事にじめめは受けてきませんでした。むしろ

「すごい。」

とみんなから言われてきました。母は明るくて、人の事を悪く言わない人なので、友達のお母さん達とすぐに仲良くなりました。母の事を理解して受け止めてくれている人が本当に多くて、私も母の事を理解してくれる人が出来てとても嬉しかったです。けれども、私の友達は、私と母のようにほんのささいな事では喧嘩しないのだろうと、普通に生活を送っている友達を密かに羨ましがっていました。

そんな事を思いながら生活してきた私も中学生になりました。本格的に英語を学び始めた時、他国の文化を理解したり、言語を話したり、書いたりする事は、こんなにも難しいのだと改めて実感しました。

私は母が出来ない事ばかりを見ていて、

「なんで出来ないの？」

と文句ばかり言つて、母の立場になつて考える事が出来ませんでした。母がいつも私にしつこく聞いてくるのは、私が先生に分からない事を分かるまで聞くように、母も自分で理解しようと頑張っていたのだと思いました。母は少しあやふやな感じだけど、会話のキャッチボールは出来ているし、言葉は少し変だけど、私に伝えたい事をしっかりと

り言ってくれます。

英語が苦手な私からすると、日本語は完璧ではないけど、上手に話す事が出来て、日本語の意味も簡単なものは理解出来て、漢字も、ひらがなも力タカナもある程度はすらすらと書いて、母は本当にすごい人だと思います。

そんな母の努力や頑張りの姿に気づけず、母を傷つける言葉ばかり言ってしまうって、本当に申し訳ない気持ちでいっぱいです。

母は偏見にとらわれず、何事もポジティブに考えており、そんな母が嫌だったり、すごく励みになったりします。

私の母は、私のどんなどころも受け止めてくれるし、私が辛くて泣いていれば、私と同じように泣いてくれて、私がほんの少しだけお手伝いをすれば、すごく喜んでくれて、たくさんお礼を言ってくれて、上手な日本語ではないけど必死に伝えようとしてくれる母が大好きです。第一に家族の事を考えてくれて、母なりにすごく努力していて、私は母の娘として産まれてきて本当によかったです。日本人、日本人ではないは関係なく、私は母が本当に大好きです。生まれ変わっても私はもう一度母の娘になりたいです。

